

# 華嚴普賢行願修證儀の研究

鎌田茂雄

## 一 序

中唐にでて教禪一致説を唱えた宗密（七八〇—八四二）は、中国仏教儀礼史の面においても重要な役割を果し、儀礼に関する著書として、『円覚経道場修證儀<sup>(1)</sup>』を著わしたのである。この円覚経道場修證儀があまりにも大部であり、儀礼を実際に行う場合、かなり長時間かかると思われるため、宋の晋水浄源（一〇一一—一〇八八）は、円覚経道場修證儀を簡略化して、『円覚経略本修證儀』一卷を撰述したのであった。この円覚経略本修證儀によって儀礼が簡略化されて行われていたとみてよい。

ところで浄源は宋代華嚴学の学匠であるが、仏教儀礼においても重要な役割を果している。たとえば大日本續藏経

華嚴普賢行願修證儀の研究（鎌田）

第一輯九十五套第五冊に収録されている『華嚴普賢行願修證儀』と題する仏教儀礼に関する書物を二冊収録している。同一題名であるがこの内容はかなり相違しているのだから大日本續藏経の五二八丁a段より五三三丁c段までに収録されているものを甲本華嚴普賢行願修證儀、五三三丁d段から五三七丁b段までに収録されているものを乙本華嚴普賢行願修證儀と名づけることにしたいと思う。以下両本の内容を検討して、華嚴普賢行願修證儀の性格について考えてみたいと思う。

## 二 甲本華嚴普賢行願修證儀の内容

甲本の撰号については、「宋傳華嚴教觀沙門晋水 浄源

集」とあり、乙本の撰号の「宋 晋水沙門 淨源集」とあるのとは異なり「傳華嚴教觀」の五字が多い。甲本と乙本の章名の相違を考えるため、両者の対照表をかかげてみよう。

甲本

乙本

通叙縁起第一

通叙縁起第一

勸修利益第二

揀擇根器第三

呵棄欲蓋第四

決志進修第五

嚴淨道場第六

啓請聖賢第七

正修十行第八

旋遶誦經第九

端坐思惟第十

嚴淨道場第二

淨身方法第三

啓請聖賢第四

觀行供養第五

稱讚如來第六

禮敬三宝第七

修行五悔第八

旋繞稱念第九

誦經規式第十

乙本の方はそれぞれの項目についてすべて簡単な説明が

附せられているが、甲本においては、通叙縁起第一、勸修利益第二、決志進修第五の三つについては、まったく説明が附せられていない。

甲本の揀擇根器第三とは、礼懺を行うことができる能力があるか否かを撰ぶことである。道場に入って礼懺に堪え得る人には、(1)起行入證、(2)滅業成信、(3)薰種結縁の三種があるという。(1)起行入證とは礼懺を行することによって悟りを証することができる人のことであり、(2)滅業成信とは、過去世の業を滅して、信を確立することができる人であり、(3)薰種結縁はそれまではいかなくとも、種子に仏法の信を薰習させて、仏縁を結ぶことができる人のことであろう。(1)より(3)に至るのは、證、信、縁と程度の差異をあらわすものと見なされる。

つぎの呵棄欲蓋第四はつぎのようについて。

欲有五禾。謂色声香味触。此五常能誑惑凡夫、令生愛著、失于道志。故欲礼懺修禅觀者、必須呵責。令心永不繫念。

蓋有五禾。一食欲、二瞋恚、三睡眠、四掉悔、五疑。此五起時、蓋覆心慧。故須棄。勿存之于心也。(續藏一九五—五、五二八a)

ここでは欲蓋を捨てよということを読くのであるが、まず「欲」とは色、声、香、味、触の五禾をいう。この五禾は常に凡夫をまどわせ、愛著を生ぜさせ、道志を失なわしめるという。そこで礼懺し、禪觀を修しようとする者は、この五禾を棄てて、心がこれに執著しないように心がけなければならぬという。ついで「蓋」とは、(1)食欲、(2)瞋恚、(3)睡眠、(4)掉挙、(5)疑の五つをいうのであり、この五つが起ると、智慧をおおいかくすので、これを捨てて、心に少しでも、この五つの悪心を起させてはならぬという。食り、瞋り、睡眠、心の高ぶり、仏法に対する疑いの五つは、仏道修道者の障礙となるので「欲」と「蓋」の二つを捨てよという。この思想は、『天台小止観』や、円覚經道場修證儀などに説かれていたもので、礼懺者がまず心がけるべき心のありようと云うべきであろう。

つぎに「嚴淨道場第六」については、きわめて簡単に「嚴壇場、淨衣服、滌身心」とあるだけである。礼懺を行う壇場を莊嚴にすること、着用している衣服を清淨にすること、身心を清めることの三つを説いている。

「啓請聖賢第七」は、聖賢を啓請するために説かれた章である。まず行者が初めて道場に入るや、普賢菩薩を稱念

華嚴普賢行願修證儀の研究(鎌田)

しながら一回旋遶して法座の前に至り、坐具を敷いて正身合掌して佇立する。その時一切衆生を慈念し、衆生を救おうとの誓願をたてる。つぎに恭しく三宝を請い、手に香爐をとって、名香をたく。そして主者が「一切恭敬」という。そこで一心の花蔵世界の帝網刹中の、徧法界常住三宝に敬礼する。その際、一拝し竟ったならば胡跪し、右膝を地に着け、焼香散花し、一心に正念し、諸仏菩薩の名字を称え、一一啓請をする。以下「一心奉請」して啓請するわけであるが、啓請する諸仏菩薩の名前と、その住処を下にあげておく。(1)大毗盧遮那仏(徧周法界)、(2)阿弥陀仏(極樂世界)、(3)一切諸仏(功德林)、(4)微塵諸仏(花蔵世界)、(5)円融法寶(大方広仏華嚴經)、(6)一切法門修多羅蔵(十方仏刹)、(7)諸大菩薩摩訶薩(第一菩提道場)、(8)文殊師利菩薩・覺首菩薩・財首菩薩・寶首菩薩・徳首菩薩・目首菩薩・精進首菩薩・法首菩薩・智首菩薩・賢首菩薩(第二普光明殿)、(9)法慧菩薩等(第三忉利天宮)、(10)功德林菩薩等(第四夜摩天宮)、(11)解脱月菩薩等(第六他化自在天宮)、(12)普賢菩薩等(第七重會普光明殿)、(13)普慧菩薩等(第八三會普光明殿)、(14)文殊普賢二大菩薩等(第九逝多林)、(15)觀自在菩薩(補陀山)、(16)彌勒菩薩(毗盧

莊嚴樓閣)、(17)善財菩薩(華嚴會)、(18)十方三世一切菩薩(華藏界)、(19)一切聲聞緣覺賢聖僧(逝多林園)、(20)執金剛神等(華嚴經)。最後の執金剛神等を一心に奉請し終ると、これで諸仏諸菩薩の奉請が終了するわけである。

つきには華嚴經、諸菩薩、諸神などに惟願して懺悔の証明をこうのであるが、その対象となるのは、毗盧遮那仏、阿弥陀仏をはじめとし、華嚴經、普賢、文殊、法慧菩薩、舍利弗などの五百声聞、六千比丘、天竜八部、執金剛神などであり、これらの諸聖衆に証明を垂れ給うように願うのである。この時、修行者は請仏の意を智力をもってのべ、さらに供養を稱讚し、旋遶読経して、三帰依文を唱える。

つぎの「正修十行第八」は(1)礼敬諸仏、(2)稱讚如来、(3)広修供養、(4)懺悔業障、(5)随喜功德、(6)請轉法輪、(7)請仏住世、(8)常随仏学、(9)恒順衆生、(10)普皆回向の十段に分かれている。まず(1)礼敬諸仏においては、その利益は七慢・九慢・十慢等の障礙を除き、自在の身を得ることができるとし、礼敬の対象となる諸仏としては、毗盧遮那仏、阿弥陀仏をはじめとして一心奉請の時と同じような華嚴經の各殿各宮の諸菩薩、金剛神などの諸神があげられている。この(1)礼敬諸仏のなかに「唵。薩唎末。怛達遏怛遏怛。巴唵

末唵。難葛浪彌」(ふり仮名は台湾語)という呪印を唱えるが、末世の行者は心が多く散乱するので、密呪の助けをかりなければ、修行を成就することができないので、密呪を用いるのであるといっている。(2)稱讚如来は口の四重障を断除して、四無礙辯を得るために行うもので、はじめに梵讚を唱え、これが終ると主者が「我比丘某甲至心稱讚如来云云」と唱え、如来を稱讚し、おわると普賢菩薩および一切三宝に帰命し奉るのである。(3)広修供養は慳貪の障礙を除くために行うもので、大衆は各々胡跪して、香花を厳持して、如法に供養する。ついで執爐して「願此香花雲云」を唱え、さらに広大不空摩尼印を結び、合掌し密呪を唱える。最後に「我比丘某甲至心廣修供養」をもっておわる。(4)「懺悔業障」は四障十障を断除して、世間出世間の一切の功德を成就するために行うもので、まず正身胡跪黙念し、ついで執爐し、「清涼偈」を黙想し、ついで出声して「至心懺悔。比丘某甲。帰命十方。云云」を唱え、密呪の後に日本仏教においても懺悔文として用いる有名な一句、

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋痴

從身語意之所生 一切我今皆懺悔  
を唱え、普賢菩薩および一切三宝に帰命する。

(5) 隨喜功德は嫉妬などの障礙を断除し、無限の福を得んがために行うものであり、(6) 請轉法輪は謗法などの罪を断除するために行うものであり、(7) 請佛住世は、憎仏、謗仏害仏および憎嫉菩薩、善知識の罪を断ずるために行うものであり、(8) 常隨仏学は違仏及び善知識を断除するためにこれを行い、(9) 恒願衆生は、衆生の種々の悪業を断除するために、(10) 普皆回向は菩提心を発せざる障礙を断じ、十度円満を得るためにこれをおこなうのである。

つぎの「旋遶誦經第九」は普皆回向が終ったあとにおいて、威儀を正し、焼香し、一一法座を旋遶し、安詳に徐歩して、「南無十方仏、南無十方法、南無十方僧、南無毗盧遮那仏」以下の仏・菩薩名を唱えること三遍、その後を問訊し、さらに一心に正念して、

自歸依佛、當願衆生、体解大道、發無上心  
自歸依法、當願衆生、深入經藏、智慧如海  
自歸依僧、當願衆生、統理大衆、一切無闕

の三歸依文を唱え、心に普賢菩薩を念じて、旋遶を終わりに列班の位置にもどったところで「四生九有云云」の四句を

華嚴普賢行願修證儀の研究(鎌田)

唱えておわる。ここで華嚴普賢行願修證儀は「旋遶」についてつぎのようにいう。

夫旋遶者、戀慕三寶微妙功德也。如是三市、乃至七七百市、亦無定數。稱諸佛菩薩名字竟。(續藏一—九五—五、五三二c)

旋遶というのは三宝を恋慕するための微妙な功德であり三市乃至は七七百市も行いので、何回廻るといふ定った数はなく、諸仏・菩薩の名字を稱名することであるという。

最後の「端坐思惟第十」においては、円教の修を明らかにしたもので、(1) 初悟毗盧法界と(2) 修普賢行海の二つに分れる。(1) 初悟毗盧法界は華嚴經で説くところの一真無礙法界であり、根本の真心をいう。この一真無礙法界は(a) 同教真心と、(b) 別教真心の二に分れる。(a) 同教真心はさらに①終教真心と②頓教真心となる。①終教真心とは楞嚴經の真心であり、②頓教真心とは起信論の離言真如であり、達磨の説いた「以心伝心、不立文字」である。(b) 別教真心とは一真無礙大法界心をいい、澄觀の説いた帝網無尽之一心がこれにあたる。

(2) 修普賢行海は(a) 帝網无尽觀と(b) 無障礙法界觀の二つに分れる。さらに(a) 帝網无尽觀は① 礼敬門、② 供養門、③ 懺

悔門、④發願門、⑥持誦門の五門に分れる。(b)無障礙法界觀については、「此の觀、是れ一切三昧の根本なり。若し常に修習すれば、則ち一切三昧、自然に現前す」という。

最後に禮懺を行ずる者の心得として、修行者が善惡の夢境にあつたり、種々の魔障に逢つたり、種々の違順の相を現じたり、身心不定などにおち入つた時には一切のものは夢幻の如きもので、すべて実有ではなく、自心より現起したものであると觀しなければならぬという。最後に起信論の「當に惟心なるを念ずべし。境界則ち滅す」を引証して修行者の心得としている。

### 三 乙本華嚴普賢行願修證儀の内容

乙本華嚴普賢行願修證儀は、その冒頭において「通叙緣起第一」以下「誦經規式第十」に至るあいだの十門をあげている。甲本とはその形式において異なるところである。まず「通叙緣起第一」では、普賢行願修證儀を撰述した理由をのべている。清涼澄觀は普賢行願品に注疏をなし、さらに宗密が普賢行願品疏鈔を著わし、これを天下に広めたという。さらに行法としては宗密が円覺經道場修證儀を

著わし、規式の範を垂れたのである。このように華嚴宗においては懺法儀式がきちんと備わっているにもかかわらず淨源の時代になると、華嚴宗の教觀を伝えながら、反って他宗の懺法を習う者があらわれるにいたつた。澄觀・宗密の華嚴宗の祖師が残した懺法あるを知らざることは、門流として何とも恥としなければならぬ。そこで淨源が熙寧二年（一〇六九）冬、円覺懺法を再治して、この華嚴普賢行願修證儀を作つたという。これによって宗密の宏功と、澄觀の茂徳を振うことができたのである。

「嚴淨道場第二」においては、聖賢を啓請するためには先づ壇場を嚴淨しなければならぬことを説く。壇場を潔めることがなければ、道心も発せず、また聖賢も感降することがないのである。まず壇場をつくるには場所を択ぶ必要がある。喧騒、汚染の場所を離れなければならない。深山幽谷が最もよいが、人間の中にあつては、一二尺の旧土を去り、香泥をもって地を塗り、幡花をかけ、中に盧舍那像を置き、両伴に文殊・普賢の二像を置き、仏前に普賢行願經を置く。彩畫した七処九会の円幢を周圍にかけ、蓮花燈を點じ、百和香を焚く。莊嚴の具はただ潔淨なるものならばよく、必ずしも珍貴なものを必要とせず、それぞれ

の分限にしたがって聖賢に奉獻、供養すればよいのである。要は虔誠をつくすや否やであり、聖賢を安置する方法も特定の規則はなく随宜にやればよいのである。ただ日時は六齋日を用いるのがよい。この日には四天王使者、諸天善神が人に下り、善悪を檢察し、修行者を守護してくれるからである。

つぎの「淨身方法第三」では修行者の心のよりどころである衣服身形を整えることを説く。礼懺を行う場合、まず心を淨めることはいうまでもないが、心淨なれば衣服身形も清淨にしなければならぬ。道場に臨入する時は、まず新しい淨依を著さなければならぬ。新しい淨依がない時にはよく洗滌した衣を着すのである。つぎに身体を濯ぐ。身体が穢れていると、神祇が衛ってくれないので、邪魔、悩乱が生ずる。淨心を保つことができ、昼夜六時、一心に修法を行い、睡眠、放逸することがなく、世事を念うこともなく、修行に専念できるのである。

「啓請聖賢第四」では、まず行者が道場に入り普賢菩薩を稱念し、遊遶一匝し、法座の前において坐具を敷き、次いで恭しく三宝を請する。一心に正念し、五体投地して一切三宝に拝礼する。まずはじめに「一切恭敬」と唱える。

華嚴普賢行願修證儀の研究（鎌田）

ついで「一心頂礼、十方法界、常住三宝」を唱える。三宝を礼してから胡跪し、手爐を執り、名香を焼き恭しく聖賢を啓請する。華嚴以外の諸宗の礼懺では、先づ香花供養しその後、啓請聖賢を行うが、ここでは円覺經道場修證儀の順序によって、香花供養の前に啓請聖賢を行うのであるという。ついで「一心奉請」して毗盧遮那仏、十方三世一切諸佛、十二分經、普賢菩薩、文殊菩薩、賢首菩薩、善財菩薩、觀自在菩薩、大勢至菩薩、弥勒菩薩、馬鳴・竜樹菩薩、舍利弗等六千比丘、一切声聞緣覺聖僧、梵釈四王、天竜八部、執金剛神、主虚空神等一切の賢聖を啓請する。

「觀行供養第五」では、大衆はおのおの跪して香花を獻持して如法に供養する。手に花を擎ち、觀行をおこなうわけであるが、その際、經文の「所有尽法界、虚空界、十方三世一切仏刹云云」を「想」する。「想」が終ると、散花して「唱」えていう「願此香花雲。徧滿十方界云云」と。このさい擎花という場合、どのような花を用いるかというならば、『觀仏三海經』によれば、草木の花を獻ずることになっているが、霜雪の時には繪綵花を獻ずるのであるという。

つぎの「稱讚如来第六」では、すでに供養がおわったの

で、正身威儀して一心に佇立し、諸仏を讚歎する。讚歎しおれば、建懺の意をのべ、自からの智力にしたがって端願してこれを陳べる。

ついで「禮敬三宝第七」では、「一心頂礼」するが、その対象は毗盧遮那仏、阿弥陀仏、法慧、功德林、金剛藏、法門辯才、普賢等一切諸仏、十二分経、十首、十慧、十林、十幢、金剛藏、妙徳、善慧、文殊師利、権実、善財等一切菩薩、一切声聞縁覚賢聖僧に対して行われる。

つぎの「修行五悔第八」は(1)明懺悔法、(2)明勸請法、(3)明隨喜法、(4)明廻向法、(5)明發願法の五段からなる。また懺悔には事懺と理懺との二つがあり『仏名経』などで説くのは事懺であり、十方諸仏を礼敬して、罪相を陳べる。理懺は『維摩経』に説かれるもので、罪性本より空なることを観じ、菩提心を発すれば、罪業は自然に推滅する。礼仏がおわるや、正身に威儀を正し、虔敬に胡跪して、右膝を地に着け、名香をたき、普賢菩薩を想う。普賢菩薩は懺悔主である。この懺悔主である普賢菩薩に対して、一心一意に、無量劫より造りきたった一切の悪業を発露し、業障を除き、淨戒を成ずる。ついで「我與衆生、無始所作云云」の「想」をなし、さらに「普爲四恩有。及法界衆生。悉願

断除諸障。歸命懺悔」と「唱」える。「唱」が終ると清涼偈を黙想し、その後で「我比丘某甲至心懺悔。我與法界。一切衆生。應當自念。云云」を言う。最後に起立して「懺悔已。歸命礼普賢菩薩。及一切三宝」といい、一拝する。(2)「明勸請法」とは、行願品の偈文によってこれを行う。「我比丘某甲至心勸請」といって偈文を唱える。(3)「明隨喜法」では「我比丘某甲至心隨喜」で初まり偈文を唱える。(4)「明廻向法」では同じく「我比丘某甲至心廻向」で初まり廻向文を唱える。(5)「明發願法」では同じく「我比丘某甲至心發願」で初め發願文を唱えておわる。

つぎの「旋繞稱念第九」では、「南無十方仏、南無十方法、南無十方僧」で始まり、さらにつぎのように唱える。

南無十身初滿盧舍那仏

南無皆蒙授記阿弥陀仏

南無華藏世界微塵諸仏

南無大方廣仏華嚴經

南無發明行願普賢菩薩

南無洞彰信解文殊師利菩薩

南無七処九會諸大菩薩

南無諸善知識善財菩薩

南無十方一切菩薩摩訶薩

このように諸仏諸菩薩の名前を唱えて、旋繞すること三匝、あるいは七匝にしておわる。ついで三帰依文を唱える。

最後に「誦經規式第十」においては、一席の懺法を行う場合に、十重梵網戒相や行願品を誦する。誦經の声を覚了すると、性空身寂にして雲影の如く、拳足下足、心無所得なるを覚了するのである。誦經がおわると、仏前に至り、三帰依文を唱え、右に旋って出づ。

若し新しい歳の初においては、七日をもつて一期とし、乃至七七日に至る間、随意にこれを行う。その場合道場の外に別に禅觀堂を置き、經文を諷誦する。その功德は十方に至り、三宝を供養し、普ねく衆生に施こし、毗盧遮那如来藏身三昧を証することができるという。

#### 四 乙本華嚴普賢行願修證儀と円覺經略本修證儀との關係

乙本華嚴普賢行願修證儀の「通叙縁起第一」の末尾はつぎのようである。

九会十行。皆載広懺儀文。自下九門、依円覺懺。但開

華嚴普賢行願修證儀の研究(鎌田)

合小異耳。(續藏一—九五—五、五三四a)

この文によると乙本修證儀の九門は円覺經道場修證儀によること明らかである。たしか乙本修證儀と、淨源の撰した円覺經略本修證儀とを比較すると、かなりの部分において対照箇所または類似点を見出すことができる。各段について対照表を附するとつぎの如くなる。

円覺略本修證儀	乙本華嚴修證儀
第一總叙縁起	通叙縁起第一
第二嚴淨道場	嚴淨道場第二
第三啓請聖賢	淨身方法第三
第四供養觀門	啓請聖賢第四
第五正坐思惟	觀行供養第五
第六稱讚如来	稱讚如来第六
第七礼敬三宝	礼敬三宝第七
第八修行五悔	修行五悔第八
第九旋繞念誦	旋繞稱念第九
第十警策勤修	誦經規式第十

乙本華嚴修證儀が全面的に円覺略本修證儀の影響を受けて作られたことが、これによって明らかである。わずかに

円覚略本修證儀の「正坐思惟」のみが、乙本華嚴修證儀に見られないのみである。なお乙本華嚴修證儀の第二嚴淨道場と第三淨身方法とは、円覚修證儀の第二嚴淨道場の文

円覚略本修證儀

第二嚴淨道場

夫衣服身形、皆是行人心所依処也、若欲修此円頓大行、先須礼懺之法、必須淨心、心不孤起、必藉依縁、依縁清淨故、心即清淨故、須嚴淨此三事也

況欲啓請賢聖、須嚴淨壇場、壇場不嚴潔、則道心不發、無所感降、是故應當嚴壇、淨服浴身、妄諸事務、調伏身心、供養三宝、一心繫念、自憶我等、有此身來及過去世中、所有惡業、專精懺悔、希修觀時、身心清淨、所有願求、悉皆尅獲其道場法、先須揀處、離於喧雜惡穢及諸障難

若得深邃巖谷幽僻林泉、最爲殊妙、若在人間、須除去一二尺舊土、以香泥塗地、懸諸幡華、堂中置盧舍那像、兩畔文殊普賢二像、是爲三聖、仏前安円覚經、以函盛之、點蓮華燈、焚百和香、諸莊嚴具、唯要潔淨、不必好貴、各隨力分、但力極即爲至貴、本獻供養賢聖、祇爲表自虔誠、豈賢

を分けてのべたものである。両者を対照すると次の如くである。

乙本華嚴修證儀

淨身方法第三

夫衣服身形、皆是行人心所依処也、若欲修此円頓大行、先須礼懺、礼懺之法、必須淨心、心不孤起、必藉依縁、依縁清淨、心即清淨、故須嚴淨衣服身形也

嚴淨道場第二

夫欲啓請賢聖、又須嚴淨壇場、不潔則道心不發、無所感降、是故應當嚴壇、供養三宝、求哀懺悔、過去世中所有惡業、其壇場方法、先須揀地、離於喧雜穢惡、及諸障難

若得深邃巖谷、幽僻林泉、最爲殊妙、若在人間、須去一二尺舊土、以香泥塗地、懸諸幡花、當中置盧舍那像、兩畔置文殊普賢二像、仏前安普賢行願經、以函盛之、如其有力、依經考疏、彩畫七処九会円幢、周圍挂之、點蓮花燈、焚百和香、諸莊嚴具、唯要潔淨、不必珍貴、各隨力分、奉獻供

聖有好惡也、其布置方法、任自隨便、亦無局定之儀式

次淨衣服者、然出家者、本合護淨、若料尋常護之不謹、即臨入道場、著新淨花、次須澡浴身体、身若穢觸、豈堪近於聖賢、雖諸仏無心、神祇不衛、則邪魔惱乱障難生也、非唯淨身、尤須淨心絶諸縁念、縦遇障難、無退志矣、三業清淨方入道場

初入用六齋日、此日四王使者、諸大善神、來下人間、檢察善惡、見修行者、安慰守護、爲現瑞相、令行者心生歡喜、增益諸根耳

以上の対照表によって明らかのように、乙本華嚴普賢行願修証儀は円覚略本修証儀によっていること明らかである。乙本華嚴修証儀の嚴淨道場第二と淨身方法第三は、円覚略本修証儀の第二嚴淨道場を分けて段を設けたことが明確になったのである。ただ両者の大きな相違点は円覚略本修証儀にある第五正坐思惟が乙本華嚴修証儀にまったくない点である。

華嚴普賢行願修証儀の研究（鎌田）

養聖賢、祇爲表自虔誠、豈賢聖有好惡也、其安置方法、任自隨便、亦無局定之儀

### 淨身方法第三

然出家者、本合護淨、若料常時、護之不謹、即臨入道場、著新淨衣、如無新者、洗浣故衣、次須澡浴身体、身若穢觸、豈堪近於聖賢、雖諸仏無嫌、而神祇不衛、則邪魔惱乱障難生也、非唯淨身、猶須淨心、絶緒縁念、專稟一心

### 嚴淨道場第二

初修方便、并其正修、皆用六齋日、此日四天王使者、諸大善神、來下人間、檢察善惡、見修行者、安慰守護、爲現瑞相、令人見者、心生歡喜、益諸根矣

## 五 華嚴普賢行願修証儀の甲乙二本

乙本華嚴修証儀が円覚略本修証儀にもとづいたものであることについては、すでに前節でのべたとおりであるが、甲乙二本の華嚴修証儀の関係はどのようなになっているだろうか。

甲本華嚴修証儀の段と乙本華嚴修証儀の段をさらにくわ

しく対照してみよう。

乙本華嚴修證儀		甲本華嚴修證儀	
(1) 通叙縁起		(1) 通叙縁起	
(2) 嚴淨道場		(2) 勸修利益	
(3) 淨身方法		(3) 揀擇根器	
(4) 啓請聖賢		(4) 呵欲欲蓋	
(5) 觀行供養		(5) 扶志進修	
(6) 稱讚如来		(6) 嚴淨道場	
(7) 礼敬三宝		(7) 啓請聖賢	
(8) 修行五悔		(8) 正修十行	
① 明懺悔法		① 礼敬諸仏	
② 明勤請法		② 稱讚如来	
		③ 広修供養	
		④ 懺悔業障	
		⑤ 請転法輪	
		⑥ 請仏住世	
		⑦ 隨喜功德	
③ 明隨喜法		⑧ 常隨仏学	

④ 明廻向法	⑨ 恒順衆生
⑤ 明発願法	⑩ 普皆同向
(9) 旋繞稱念	(9) 旋繞誦經
(10) 誦經規式	(10) 端坐思惟

以上の対照表によって明らかのように甲本華嚴修證儀の(2)勸修利益、(3)揀擇根器、(4)呵欲欲蓋、(5)扶志進修、(10)端坐思惟の四段は乙本華嚴修證儀にも、円覚略本修證儀にも見られないものである。ちなみに甲本華嚴修證儀の(10)端坐思惟は、円覚略本修證儀の(5)正坐思惟に相当すると思われるが、実はその内容において全く異なるものである。甲本華嚴修證儀はあくまでも華嚴哲学にもとづく觀行を説くのに對して、円覚略本修證儀の(5)正坐思惟はむしろ天台小止觀にもとづく数息觀を説いているにすぎない。甲本華嚴修證儀の第四段に「呵欲」などということばがあるが、これらも天台小止觀の影響であろうか。

なお甲本華嚴修證儀の第八正修十行のなかの各項の大部分は、乙本華嚴修證儀の(5)觀行供養、(6)稱讚如来、(7)礼敬三宝、(8)修行五悔の各段にそれぞれ対応すること、比較対

照表の示す如くである。

以上のべたことよってほぼ検討せられたことをまとめると、乙本華嚴普賢行願修證儀は、円覚経略本道場修證儀にもとづいていること明らかであり、甲本華嚴普賢行願修證儀とは同一名称であるにかかわらず、その成立の背景が異なっていることがわかる。しからば甲本華嚴普賢行願修證儀は何にもとづいて成立したのであろうか。まず第一に浮ぶのは天台小止観であり、さらに天台小止観を全廻

的に引用した宗密の円覚経道場修證儀によるとも考えられるのであるが、これらの問題点の究明と、浄源の『首楞嚴壇場修證儀』との係属などについては他日を期したいと思う。

- (1) 拙著『宗密教学の思想史的研究』（昭和五十年、東京大学出版会）第八章「宗密の仏教儀礼―特に『円覚経道場修證儀』を中心として―」参看。